

熊本高等専門学校熊本キャンパス

# くぬぎの森

図書館だより

第34号

2023年2月発行

## 〈 目 次 〉

- 図書館だより表紙・目次・読書感想文コンクール入賞者および表彰式写真・・・p.1
- 校内読書感想文コンクール入賞作品対象本・・・p.2
- 校内読書感想文コンクール最優秀賞・第68回青少年読書感想文コンクール熊本県審査「佳作」両作品・・・p.3~4
- ランキング TOP5・・・p.5
- 図書館長エッセイ：秘境の神社へ・・・p.6~12
- スタッフからのおすすめ本・・・p.13
- 「読書感想文」の意義とは？・・・p.14
- 図書館入退室システムについて・・・p.15
- 学生図書委員が選ぶおすすめ本コーナー・編集後記・・・p.16~17
- 図書館統計等・・・p.18

## 校内読書感想文コンクール入賞者

【最優秀賞】 言葉で繋がる思いと願い  
1年3組 中田 結心

【優秀賞】 人生の導き手  
2年1組 相良 由奈

【優秀賞】 私が変わるために  
2年1組 重松 知樹

【優秀賞】 二十一世紀を生きる私たちより  
2年1組 泊 陽仁

【佳 作】 大人になっても消えないもの  
1年2組 松田 ひかる

【佳 作】 私も彼女の臍臓をたべたい  
2年2組 菅野 凜音

【佳 作】 戦争と愛  
2年3組 中島 直央

【佳 作】 日常にひそむ素晴らしい書籍  
2年3組 上村 拓也

【佳 作】 『忍びの国』を読んで  
1年1組 吉村 旺祐

■ 令和4年度校内読書感想文コンクール  
表彰式



■ 第68回青少年読書感想文全国コンクール  
熊本県審査「佳作」表彰式



## 校内読書感想文コンクール入賞作品対象本

### 【最優秀賞】

言葉で繋がる思いと願い  
1年3組 中田 結心

■対象本  
『雲雀坂の魔法使い』  
(沖田 円 著)



### 【佳作】

大人になっても消えないもの  
1年2組 松田 ひかる

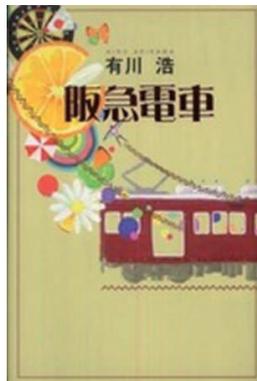
■対象本  
『星の王子さま』(サン＝テグジュペリ著)



### 【優秀賞】

人生の導き手  
2年1組 相良 由奈

■対象本  
『阪急電車』  
(有川 浩 著)



### 【佳作】

私も彼女の臍臓がたべたい  
2年2組 菅野 凜音

■対象本  
『君の臍臓をたべたい』  
(住野 よる 著)



### 【優秀賞】

私が変わるために  
2年1組 重松 知樹

■対象本  
『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』  
(ブレイディ みかこ 著)



### 【佳作】

戦争と愛  
2年3組 中島 直央

■対象本  
『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』  
(汐見 夏衛 著)



### 【佳作】

日常にひそむ素晴らしい書籍  
2年3組 上村 拓也

■対象本  
『日常にひそむうつくしい数学』  
(富島 佑允 著)



### 【優秀賞】

二十一世紀を生きる私たちより  
2年1組 泊 陽仁

■対象本  
『二十一世紀に生きる君たちへ』  
(司馬 遼太郎 著)



### 【佳作】

『忍びの国』を読んで  
1年1組 吉村 旺祐

■対象本  
『忍びの国』  
(和田 竜 著)



## 校内読書感想文コンクール【最優秀賞】 言葉で繋がる思いと願い

—『雲雀坂の魔法使い』を読んで—

### 1年3組 中田 結心

「魔法使い」、もし出会えたらどんなにいいことだろう、と私は思う。私が願いを持つように、人間は皆一つは願いを持っているだろう。雲雀町の雲雀坂に、魔法の営む店があるらしい。植物の多い店内で、美しい魔法使いは、今日も自由気ままにあなたを待つ。これは、そんな一人の魔法使いと願いを抱え、店を訪れる人々についての物語だ。

物語の終盤、慎という名の少年が魔法使いである瑠璃の弟子になって早九年、誕生日を迎え、魔法の世界では成人となる十五歳になった慎に、瑠璃が名付けの魔法をかけると言い出した。しかし、瑠璃の使える魔法はあと一回だけである。あと一回魔法を使えば瑠璃は消滅してしまう。もう二度と魔法は使わないで、これからは僕のそばにいてくれるよね、とお願いする慎へ返事はせず、慎の必死の制止を振り切って瑠璃は慎に「翠」という名を与えた。最後の魔法を使い、体が崩れていく瑠璃、「魔法は勝手な生き物、君を悲しませようと、私は私の自由に生きる」そう笑う瑠璃にむかって、翠はこう言い放った。「師匠の馬鹿！大嫌い！」この言葉を聞いた瑠璃はこう言った。「待って待って。それはきっと後悔するからやめておけ。そんなことを言って別れてしまって本当にいいのかい？」私はこの言葉を聞いた時、頭を殴られたような感覚を覚えた。「後悔」という言葉に驚いたからだ。言葉はときに、言った本人までも傷付ける。こういう場面でそのような意味合いを持つ後悔という言葉を使えたのは、たくさんの人と出会い、話していく中でそれをしっかり理解した瑠璃だからこそだったのかもしれない。

この物語を読みながら考えることは、言葉の本質についてだ。言葉は素晴らしいものである。それを否定することは私にはできない。文明の発展に言葉が大きく貢献したことも、間違いではないだろう。人は言葉を使って、気持ちを伝え、人と関わってきた。ときには時代を超えた繋がりもあったのかもしれない。

この物語でも言葉はかなり重要な役割を果たしている。過去に縛られ、すれ違い続けた幼馴染、余命短い画家とその飼猫、売れない小説家と旅館の女将、笑うことしかできない兄と心配する弟。彼らを繋ぎ、前へ進む勇気を与えたのは言うまでもなく言葉だった。言葉はあたたかく素敵なものだ、私は改めてそう思った。同時に、気持ちを伝えることも大切だと思った。いくら思

いが強くとも、言葉にしないと伝わらないことがある。例えば、ありがとうもごめんなさいも言葉にしないと伝わらないように、伝えることが大切なのだ。

一方で、私の思う言葉の持つ恐ろしい一面にも修正が加えられた。言葉で傷付くのは、言葉を投げられた相手とばかり思っていた。しかし、慎の経験から言葉の攻撃範囲に自分も含まれていることに気が付いた。自分が発した言葉で誰かの心に傷をつけてしまうように、自分の心にも後悔という傷を付けてしまう。また、言葉の選択や使い方間違えると本意に相手を気付付けてしまい、大きな溝ができてしまうかもしれない。言葉を使う時には十分に気を付けなければならないと強く思った。

ここまで、言葉について考えたことを記してきたが、我ながらありふれた考えだなと思う。どこかで聞いたことがあるようなことばかりだ。それでも私が改めて考え、記したのは、忘れたしまっているからだ。

言葉というのは水と同じく変幻自在で、ときには自然を潤し、人々の生活を豊かにする。誰かを優しく包み込むことだってできる。しかし、人を殺めることも容易なのだ。私には考えられないくらい強い力を持っているのだ。それでも人間には必要不可欠なものだ。それを私たちは忘れてしまいがちだ。身の回りにありふれていて、あるのが当たり前すぎて、忘れてしまう。

今はSNSで簡単に自分を発信できる世の中になった。コメント欄で簡単に自分の意見を言える世の中になった。人と繋がることできる、気持ちを伝えることができる、それは素晴らしいことだが、言葉は使い方によっては人を気付付け、ときに殺めてしまうことを忘れてはいけない。発信してしまえば二度と消えないからこそ、いつも以上に慎重にならなければならない。

言葉は難しい。でも、この物語の中で多くの人を救ったように、誰かを救うことができる。誰かに優しく寄り添うことだってできる。言葉のあたたかさや怖さをこの本に教えてもらった。私は絶対にそれを忘れたくない。

これから先の人生、一生言葉と関わっていく。新たな言葉が生まれ、今より簡単に会話ができるかもしれない。しかし、私は言葉を慎重に使いたい。たとえ時間がかかったとしても、言葉を吟味し、自分の伝えたいことを正しく伝えられる人でありたい。そうして、豊かな言葉の繋がりを大切に、多くの人の笑顔を守ることができる技術者になろうと思う。

「人は、生きている間におおくのものを失う。その中にはかけがえのないものだってある。どうしようもない別れもある。だから、どうか大切にするんだよ。失わないように、自分自身で守らなければいけないよ」翠の言葉を胸に刻んで。

**校内読書感想文コンクール【佳作】**  
**第68回青少年読書感想文全国コンクール**  
**熊本県審査「佳作」**  
**戦争と愛**

—『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』を読んで—

**2年3組 中島 直央**

この本の主人公は、親、学校、とにかくすべてのことにイライラした毎日を送る中学二年生の百合である。ある日、母親とけんかして家を飛び出し、近くにある裏山の防空壕で一夜過ごそうと考えた。だが、目を覚ますとそこは七十年前の戦時中の日本だった。そんな中、特攻隊員の彰という二十歳の青年と出会いお互い惹かれあっていく。しかし彰は命を懸けて戦場に飛び立つ運命だった。この本は、戦争と平和とは何か、生と死とは何か、愛とは何かについて深く考えさせられる物語だと私は思った。

まず、この本で印象に残った場面は、百合が痩せ細った男の子を見つけたときに「何とさえいえばいいのかわからない。何を思えばいいのかわからない。どうしてこんなにひどいことが起きるんだろう。誰のせいなんだろう。誰が悪いんだろう。誰に怒れば、誰を憎めばいいんだろう。分からなかった。」と感じた場面だ。なぜこの場面が印象に残ったかというと、私も同じことを考えたからだ。助けたくても助けられない、戦争のせいで家族を失い、お金も食べるものもなく、飢えに苦しんで、盗みを働こうとする。そんな世の中になってしまったのはなぜか、なぜ戦争なんか始めたのか。他にもこの男の子と同じような境遇の人はたくさんいて、みんなを助けることなんて出来ない、それを「仕方ない」「どうしようもない」と考えることしか出来ないことが悔しいと思った。そして彰の「お前は、生きて守れ」という言葉も印象に残った。これは彰と同じ特攻隊員の板倉さんが、特攻の前日に、大切な人を守りたいという理由で特攻に行きたくない彰に訴えかけた場面だ。私は「お前は」という部分がすごく悲しかった。まるで「俺は」死んで守ると言っているように感じたからだ。今の私たちの生活から考えたら、大切な物や人を守ることは自分が生きていることが前提で「死んで守る」という言葉は使わない。しかし戦時中の日本では、ましてや特攻隊員なら「死んで守る」ことが普通だったのかと、悲しすぎるし酷すぎるなと思った。なぜ生きたいのに生きられないのか、なぜ大切な人を守るために死なないといけないのか、残された人はどう生きていけばいいのか、なぜ、自分の意思とは無関係に、「死ぬこと」を強要されないとい

けないのか、分からなかった。

そしてこの本は彰と百合の恋愛物語でもある。私は百合も彰もお互い好きと言葉にしなかったことが辛く感じた。しなかったというより出来なかったのかもしれない。伝えたとしても苦しいだけ、一緒に居られないのなら、伝えずに自分の気持ちに蓋をしておいた方がいいと思ったのではないかと考えた。それは彰が特攻隊員で死んでしまうことが分かっているから。だから最後まで彰は百合のことを妹のようだと言っていたし、百合も彰に、「妹のように思うなら行かないで」と言っていたのではないか。なぜ何もしていない人がこんな思いをするのか、好きな人に好きと伝えられない辛さ、明日居なくなるかもしれないという不安を抱えながら生活していくことがどれだけ辛いのか、私には耐えられない。そして彰が残した遺書にあった百合への思いが全て過去形になっていることが悲しかった。その中でも特に「愛していた」という言葉が辛かった。もう自分が居なくなると分かっている、百合とこの先一緒に暮らしていけないから過去形なのではないかと考えた。

最後に、現代に戻った時、いじめっ子たちに立ち向かう姿は、大切な人を失う悲しみを経験したからこそその行動だと思った。命を軽く見ている人に腹が立ち怒ることも、全員見て見ぬふりをしている中助けることも、昔の百合だったら考えられなかったことだろうと思う。彰だけではなく食堂に通っていた沢山の兵隊達が自分の命を懸けてでもお国のために戦う姿を身近で見て、大切な人を失うことがどれだけ辛いことか、命がどれだけ尊いものかを経験したから百合の行動が変わったと思う。

最近では戦争が過去のことではないと感じる。なぜならロシアとウクライナの戦争の様子をよくニュースでみるからだ。今日までそれほど多くはないが過去の戦争の映像を見てきた。しかし今はカラーでたくさんの戦争の状況がテレビに映し出される。家が破壊されている映像、爆弾が飛んでいく映像、小さな男の子が泣きながら一人で隣の国に逃げている映像を見たときはこの本と重なりとても苦しかった。戦争をして何になるのだろうと思う。たくさんの人を犠牲にしてまで得たいものがあるのか。得たとしても価値はないし、兵隊に取られた人だって本当は戦争なんかやりたくないと思う。だからといって反対したら捕まる。そんな世の中は本当におかしいと思う。過去の戦争から何も学んでいないと思う。私たちは私たちに出来ることを考え続け、伝え続け、過去の戦争を忘れないことが平和につながると思う。

# ランキング TOP5

本キャンパス図書館で今年度に借りられた本のランキングをご紹介します。  
 ランキングでは、TOEICの学習書が頻繁に借りられています。  
 英語の資格によって英語の授業が免除になります。1～3年生の皆さんも取得を  
 目指して挑戦してみてください。

**TOP1** 51回 ETS著

『公式TOEIC Listening&Reading問題集 8』

①



②



**TOP2** 28回 ETS著

『公式TOEIC Listening&Reading問題集 7』

**TOP3** 25回 花田徹也著

『1駅1題新TOEIC L&R TEST文法特急』

③



④



⑤



**TOP4** 24回 ETS著

『公式TOEIC Listening&Readingトレーニングリーディング編』

**TOP5** 21回 TEX加藤著

『新TOEIC TEST出る単特急 金のフレーズ』

一般書順位		
順位	書籍名	回数
1	Pythonで学ぶディープラーニングの理論と実装/斎藤康毅著	19
2	自我体験とは何か：私が<私>に出会うということ /高石恭子著	15
3	Duo 3.0 The most frequently used words 1600 and idioms 1000 in contemporary English/鈴木陽一著	14
3	中国手仕事紀行：雲南省・貴州省/奥村忍著	14
5	CUDA by example：汎用GPUプログラミング入門/Jason Sanders, Edward kandrot共著	12

文学書順位 文学(900)に括った場合		
順位	書籍名	回数
1	ラノベ古事記：日本の神様とはじまりの物語/小野寺優著	15
2	同志少女よ、敵を撃て /逢坂冬馬著	7
3	すべて真夜中の恋人たち /川上未映子著	6
3	非終伝 /西尾維新著	6
5	太宰治 1909-1948 /太宰治著	5

図書館長エッセイ 秘境の神社へ

図書館長 村上 純

まず『乱読のセレンディピティ』(外山滋比古著)という本から何か所か警句的に引用したい。

「本は身ゼニを切って買うべし。そういう本からわれわれは思いがけないものをめぐまれる。」

「あふれるほどの本の中から、何を求めて読むか。それを決めるのがたいへんな知的活動になる。」「乱読がよろしい。(中略)かりそめの読者がしばしば大きなものを読みとる。」「乱読はジャンルにとらわれない。(中略)とにかく小さな分野の中にこもらないことだ。広く知の世界を、好奇心にみちびかれて放浪する。」「新聞は雑誌より雑然としているだけに乱読入門には適している。」「セレンディピティ(serendipity)思いがけないことを発見する能力。」「セレンディップの三王子にちなむものである(中略)。三王子はおもしろい才能をもっていた。たえずものを見失う。それをさがすのだが、さがすものは出てこなくて、思いもかけぬものが飛び出してくるのである。」

「積極的な乱読は、従来の読書ではまれにしか見られなかったセレンディピティがかなり多くおこるのではないか。」

私も「読書メイン」と日頃からいっているとおり乱読であり、三日に一冊のペースで読む。「身ゼニを切って買」い、読んだ本は集積しているので単行本しか買わない。新聞のよさ(特に全国紙)にも気づいていて、毎朝さっと目を通す。本は近年は、ほとんど古書店でしか買わず、中でもワゴンセールは幅広いジャンルの本を短時間で選ぶことができるし、何より激安である(百～三百円くらい)ので大好きである。ただし、出してある本の選び方には店主の嗜好が反映されるから要注意。郊外の古書チェーン店にも行くが、数店にまめに通っているため、さっと見渡すと新入荷本は目につき、すぐに選べる。私の警句は、「セレンディピティは古書店のワゴンから」。以下は、昨年そうして買って、読んだ乱読をもとに考えたこ

とをまとめたものである。

◇ ◇

CSのチャンネルに『秘境駅の旅』という番組があったたまに観ることがある。「秘境駅」という言葉が広く知られるようになったのは、Wikipediaによれば牛山隆信氏の著書からだそう(同氏の肩書は鉄道ファン、秘境駅訪問家とある)。番組は、秘境といえるか分からないが、特に何も無い田舎の駅で降りて、駅舎を見たり、付近をうろついたりして、次の駅に向かうか戻るかするだけの内容である。それにもかかわらずなかなかよくて、観ていて嫌にならない。エンディングに流れる中島みゆきの「ホームにて」もいい曲で、私はカラオケで歌ったりもする。



南関町：上南田原熊野神社

去年の本誌『図書館だより』にも書いたが、週末になるとあちこち(県北が主)の神社を訪ねている。神社めぐりが趣味などという理由を聞かれることも多くて、一昨年、熊本の石橋の本を見て以来→川や滝や水源・湧水にも関心が湧いて→その近くによくある神社へとだんだん興味が移っていったからと答える。すると相手は、分かったような分からないような…。神社では、山奥や森の中にある「秘境神社」に惹かれる。特に長い石段のある神社が好みである。(前回書いたとおり熊野神社や熊野坐神社が県内にたくさんあることが気になっていて、それは山の中にあることが多いので、その訳を探りたいとも思っている。)「秘境神社」という言葉は私のオリジナルかと思っていたら、ネットで調べてみると既に使われている言葉のようで、世の中なかなか面白いなと思える。

神社めぐりは前日の夜か当日の朝、道路地図

帳とGoogle Mapsで調べてから出かけ、カーナビを見ながらのドライブになる。ただし、私の興味ある「秘境神社」への道や場所は詳しく載っていないことも多いので、そんなときには地元の人に尋ねるのが一番いい。たいてい神社は集落の近くにある。人に会わないこともあるが、庭や畑に年配の人を見かけたらすぐに聞いてみる(年配の人しか見かけないことが多い)。「県内の神社を回っています」というと親切に教えてもらえることがほとんどで、軽トラで先導してくださった方や、私の車に乗り込んで案内してくださった方もいた。休日の朝は、地元の人たちが清掃中だったり、たまにお詣りの人に会うこともある。そんなときには挨拶すると、昔は村の人たちが集まって食事をしたなどと、話を聞かせてもらえる。どんなに「秘境」の神社も、たいていはきちんと手入れされていて、神社と人とのつながりはまだまだ切れてはいないのだということが確認できる。いくつかは、氏子の高齢化で山の上までは行けなくなり下へご神体を移したのものや、村の人たちに聞いても場所が分からなくなっていたところ、手入れされておらず荒れかけていたところもあった。



「縄文神社」という言葉があると同好の方から教えていただいた(それをタイトルにした本も出ているようで、つい先日古書店で見かけたので購入したがまだ読んでいない)。そのイメージは『原始の神社をもとめて—日本・琉球・濟州島』(岡谷公二著)という本がもとになっているらしい。岡谷氏の本は前に『神社の起源と古代朝鮮』を読んだことがあって、そちらの方が後に出たものだったので、神社めぐりは続けていたものの、この本は読まないままになっていた。昨年末にコロナ以来久しぶり街に出て古書店のワゴンで金達寿著の『日本の中の朝鮮文化』と『日本の中の朝鮮文化2—山城・摂津・和泉・河内』を買って読んだらとても面白くて、古代の神社のことが気になってきた(埼玉に住む親戚から高麗神社に行った話を聞いたことも関係ある)。この本には、「およそ神宮・神社と名のつくものは、すべてその元をただせば朝鮮と関係あるものばかりだといっても、けっして

過言ではないであろう」、あるいは「おそらく日本にある神社・神宮というものはすべて、その起源が古ければ古いほど、朝鮮との関係を深くしているものとみななければならない」とあり、それは読み進めるほどに説得力を増す。また、神社というのは、もとはみな墓だったのではなかったかという説も紹介されている。さらに、熊野神社について「朝鮮の檀君神話にあるコム(熊)」が「日本の熊野、熊野神社などのクマ(熊)」と関係があるのではないかと書かれていることも見逃せない。

そこで、『原始の神社をもとめて』も購入して読んでみると、第七章「神社をめぐるいくつかの問題1—縄文・弥生と神社」には「一部の神社の起源が縄文にまで遡る可能性が出てきた」とあって、「神域内や近くに縄文遺跡があるか、縄文の遺物を出土する神社を、煩をいとわず列挙して」ある。第八章「神社をめぐるいくつかの問題2—神社は墓か」には「神社の神域内に古墳を設けたとするより、古墳を祀るために神社が創祀されたとする方が自然であり、「本殿そのものが古墳の上に建つ神社、あるいは本殿のすぐ裏に古墳のある神社の多さは、このような推測の大きな根拠をなす」として、いくつかの例が挙げられている。これらの例示がもとになって「縄文神社」という言葉が生まれ、関連の本やウェブサイトができたのではないと思われる。(最近読んだ武光誠著『目からウロコの古代史—イザナギ神話から壬申の乱まで』に、「古墳は首長霊信仰とともに生まれた」とあり、「首長霊信仰とは、大和朝廷の成立にともなって新たに生じた信仰である。それは、今日の神道の原型の一つとなった」とあったので参考のため追記する。)

それで、岡谷氏の『神社の起源と古代朝鮮』を本棚から取り出して見ていたら、「あとがき」を読んで吃驚した。「(金達寿氏の)神社も神宮も新羅から入ってきたのです」という言葉には「多くの真実を含んでいると思っている」とあって、「神社の成り立ちに、古代朝鮮、とりわけ新羅—伽耶の地域が或る役割を果たしたとだけは断言できる」と書かれていた。さらに、「本書は、金氏の言葉を内側から検証しようとした試みである」

とあったのである。いやいや、ほんと読書は面白いな、と思った次第。

なお、当然ではあるが、神社について全部が全部「朝鮮と関係ある」というものではなく、たとえば熊本大学附属図書館(熊大図書館)の除籍済図書『照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ』(佐々木高明著)には、稲作以前の「いくつかの日本文化の源流」として、中国大陸の揚子江以南からの照葉樹林文化のほか、ムギ類のような北方系作物やアルタイ系言語などユーラシア大陸中北部起源の文化、イモやアワなどの焼畑農耕を持つ南方のオストロネシア系文化が挙げられている。この本はそれらの中の照葉樹林文化を論じたもので、Ⅲ章「照葉樹林帯の民俗文化誌」の「共通する生活文化の特色」の節では、「祖先の霊は山に赴き、そこに永く住むという他界観」に関して、祖霊は「祭りの日に村々や家々を訪れ、再び祭りを終えて山に帰る」パターンの共通性が取り上げてあり、わが国でも「古風な神社では山と里の二カ所に祭場があり、本来の氏神、つまり祖霊をまつる祭祀は、里宮で行うのではなく、山宮で行う例が少なくない」とある。そして、「このような山上他界の観念や山に死者を葬る習俗は、基本的にいって水田稲作文化と深い結びつきをもって発達してきたとは考え難い」と書かれている。稲作以前であれば、「縄文」やそれ以前になる。

◇ ◇

さて、「縄文」といえば、岡本太郎著『神秘日本』が印象深かった。たとえば、「歴史の奥深くかくされた原始日本。縄文文化の土器、土偶の、奇怪な、呪術的美学がこの気配に対応していないだろうか」など、その文章は力強い。彼は「未開の社会において、宗教は社会生活と不可分で、その核をなしている。思索的になったり、孤独な信仰になるのはかなり後の発展である」として、「その聖所は部落の中か、あるいは周辺にあったと考えられる。村の鎮守さまなどは後の姿である」という。そして、「古い神社形式など、いかにもウタキからの発達を思わせる」と書き、「かつては素朴な聖所であった。その上に、後世の神社形式の皮がかぶさっているのだ」とも。さら

に、「はじめは清らかに単純だ。美しくしずまった森。神託によって定められた聖域が氏族生活の中心だ。その秘めた場所に、ひそかに超自然のエネルギーがおりてくる。それにつながり、受けとめることをぬきにして、彼らの生活の原動力を考<sup>ウタキ</sup>えることはできない」とは、御嶽について述べた文章である。

先の岡谷氏も『原始の神社をもとめて』で、「御嶽の問題は、原始の神社の問題でもあつて、それは「私にとってもっとも大きく、重要なテーマである」から、「あと数年は、御嶽や堂の旅を続けなければならぬ」と「あとがき」に書いている。「堂」とは朝鮮半島の聖地で、特に済州島に多く残っているそれは「沖縄の御嶽に似て「数本の<sup>ダン</sup>大木がこんもりと繁った、いかにも神の森らしいたたずまいの」聖地だという。



熊本市北区：兎谷金山彦神社

岡本は久高島の「大ウタキ」を訪ねて次のように書いている。「気をぬかれた。沖縄本島でも八重山でも、御嶽はいろいろと見たけれど、何もないったって、そのなさ加減。(中略)とりたてて目につく神木らしいものもなし、神秘としてひっかかってくるものは何一つない」と。それで「何の手応えもなく御嶽を出て」村へ帰った。しかし、「何かじーんと身体にしみとおるものがある」という。そして、「なんにもないということに圧倒され」ている。そして述べる。「日本の古代の神の場所はやはりこのように、清潔になんにもなかったのではないか。おそらくわれわれの祖先の信仰、その日常を支えていた感動、絶対感はこちらと同質だった。でなければこんな、なんのひっかかりようもない御嶽が、このようにピンと肉体的に迫ってくるはずがない」と。「神聖感<sup>ウタキ</sup>はひどく

身近に、強烈だ。生きている実感、と同時にメタフィジックな感動である。静かな恍惚感として、それは肌にしみとおる」とも。

◇ ◇

「縄文」から「東北」へと私の関心は広がっていった(上述の岡本の本の「東北文化論」と副題にある項の影響もある)。周知のとおり北海道・北東北の縄文遺跡群は令和三年に世界文化遺産に登録された。『みちのく異質文化圏』(北篤著)によると、縄文文化圏は日本列島の全体にわたるようで、縄文中期から晩期になると「縄文遺跡は東日本が稠密になり、「東北地方を中心に、華麗な土器群をうみ出す」のだという。この「精製土器は祭りや葬送など、特別の行事にだけ用いられたようで」、それは「縄文的信仰に通じ、縄文人の思想を思わせる」と著者は書いている。彼らは「縄に、神聖な魔力がある、と信じ」て縄目をつけ、さらに漆やベンガラを塗って「土器に血がめぐり、生命が通い、いつまでも残ると思った」のだと。土偶も同様。「『遮光器土偶』とか、その紋様だけを、『遮光器文様』などと呼んでいる。…東北および関東からしか出土しないので、東日本の特異性を示す」とある。著者の主張は「文化は北方から」。司馬遼太郎の評「白河以北は土俗的エネルギーがもの凄い」も引いてある。

ちなみにこの本の著者の名字は「北」であるが、高橋克彦著『東北・蝦夷の魂』に「北という珍しい姓は、三戸城の北の守りの意味を込めて、南部本家から授けられたもの」だとあった。ほかにも、同様の意味から東と南の姓もあるという。南部氏は三戸城を拠点として北奥羽に勢力を持った氏族。高橋氏のこの本には、「津軽の民が古代から信仰していた神にアラハバキがある」とあり、「御神体は黒光りする鉄の塊という謎めいた神で、未だに招待は解明されていない」という。Wikipediaを見ると、「アラハバキ『縄文の神』説、『蝦夷の神』説は定着している」ようで、荒覇吐、荒脛巾、阿良波々岐などと表記されて「現代でも全国各地の神社でひっそり祀られている」そうだ。

閑話休題、「土俗的エネルギー」などという

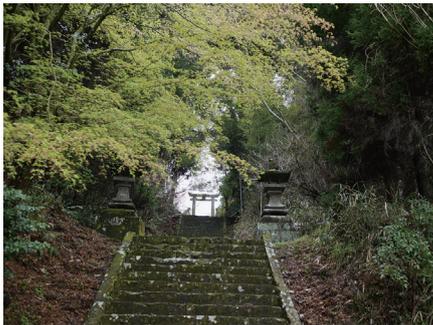
と、また岡本に戻ってしまう。彼の著書『わが世界美術史—美の呪力』では、「北欧、フランス、オーストリア、スペイン、イタリアなど、ヨーロッパの全域から見出される」という「組紐文」に注目しており、それは「もとをたどればひろくユーラシアの全体にひろがっているものと思われる」とある。「そのムードはスキタイ、シベリア、さらにエスキモー、日本の縄文土器や蝦夷文様とさえ相通ずる響きを伝えている」とも。そして、「世界宗教に統一される以前のユーラシアの広大な天地には、かつては多様な民族的信仰があつて、「神々は高く青い空を負うて、広々とした土地を、そして密林をこえ、河を渡り、民族のヴァイタリティーとともに、夜と昼の世界をくぐり抜けてきたのだ」と。彼は「組紐文を見るたびに、そのような生活感、始原の感動を直観する」のだという。「いつもシステムの壁にぶつかって絶望している現代人は、この根源のイメージに言いようのない魅力と救いを暗示されるのである」と。

◇ ◇

本誌の前々回分に阿部謹也著『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描』を取り上げたが、これも熊大図書館除籍済図書からいただいて、同じ著者の『ヨーロッパを読む』と『歴史を読む—阿部謹也対談集』を昨年読んだ。著者の本はどれも知的好奇心を刺激してくれるものであるが、特に前者は興味深かった。この本は福岡の出版社、石風社のレクチャーでの講演記録を集めたものである。著者はドイツ中世史が専門であるからヨーロッパの話になるが、中世の人間は均質な時空観念の中ではなく、二つの宇宙の中で生きていたと書いてある。「自然界の諸力を人間がかろうじて制御しようと考えられていた範囲内」の小宇宙・マイクロコスモスと、「その外側に人間にはとうてい制御しえない」大宇宙・マクロコスモスがあるというのである。二つの宇宙は同心円であって、中世だけでなく古代から「宇宙というものを表すときにこの両方の二つの観念で表すというのは世界中で普遍的なこと」だともある。人間は大宇宙を相手とする存在であったが、「中世は

農耕社会になったがゆえに、大地を耕す農業が小宇宙の仕事として取り込まれてしまいい、そしてそれによって西欧中世文化が生まれたのだという。

この二つの宇宙の存在を、キリスト教は否定したとある。「キリスト教的な大宇宙の論理で小宇宙をも含めて全てを一元的に整理をしようとした」と。著者はその二つの宇宙のはざまに生きる人々について関心を持ち、詳しく述べるのであるが、それについてはここでは割愛する。小宇宙の中の人間にとって大宇宙は「全く不可解」であるにもかかわらず、「キリスト教会が、これは一つの宇宙だと主張する限りにおいて不可解なものは存在しない」ので、「全てのものは解明可能だ」となって、解明しようとする努力がなされる。そこから「近代西欧文明の元になるような、新しい自然との対応関係が生まれてくる」と。それは「人間がこの世の主役だ」という考え方なのだという。

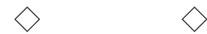


山鹿市鹿央町：梅木谷阿蘇神社

岡本はいつていた。「今日、文化といい芸術といい、すべて西欧近代思想の体系によって意識されている。(中略)それ以外に世界を見るシステムをもたないし、能力さえ失っているのではないか」と(『神秘日本』)。しかし、「根底のところ、われわれはやはり違っている。何かのこる。同じ近代生活、同じスジの考え方をしても、その底にもっている初源的な感動には何か異質のものがある」。「われわれは時間によって区切られ、いつも追いかけられ」ている。それは「世界じゅうのオーガニゼーション・マンが、自覚するしなにかかわらず落ちこんでいる絶望的なシチュエーションである」。一方、「時空を超越して、

食べたいときに食べ、勝手なときに眠り、目がさめたら偶然そこにお日様があがっていた、というような、また人と会う約束なんかもしない、つまりユーキューの時間」がある。彼はそれらを「二つの矛盾する時間」と呼ぶ。「どうしたら二つの矛盾する時間をそのまま捉え、生命の充実をとりもどすことができるか。」「もっと平気で素っ裸のままの時間というのはないのだろうか。底ぬけで、無邪気で。」「生命の充実」とは、彼の言葉でいえば「民族の底の奥ふかいエネルギー」を喚起するということになる。彼が沖縄で感動した「純粋さ」。それが「エネルギーになるためには、転化されなければならない」ともある。

『わが世界美術史』には次のようにあった。「進歩進歩でひたすら流れてゆく社会体制の中にあるながら、芸術こそ、社会の部品である空虚感を脱し、時空を超えて人間再発見をしなければならぬ」と。だから「本当の世界観は、現時点、この瞬間と根源的な出発点からと、対立的である運命の両極限からはさみうちにして、問題をつきつめていかなければならぬ」。そこから、縄文のヴァイタリティー、根源のイメージへの彼の指向があるのである。



今回の話題は秘境の神社めぐりから縄文神社など「縄文」へとつながり、そこには沖縄や東北、朝鮮半島、西欧(や古代オリエントまで)、つまりユーラシアにも関連するテーマがあることが分かった。さらに、山や森の信仰と神社の関係や、水とのつながり、そして熊野神社についてもまだまだ読んだり、足を運んで写真を撮ったりするつもりである。「趣味は何ですか」と聞かれたら、当分は「神社めぐりです」と答えることになると思う。最近では古墳も見に行っているが…。

最後に去年読んだ本で上述の内容に関連して印象に残っている本をいくつか挙げる。

- ・『水のなまえ』(高橋順子著)：著者は詩人で、夫君は平成二十七年に亡くなった直木賞作家の車谷長吉(彼の本は読んだことがある)。「川が流れ、山が聳え、樹木におおわれ、花々に彩られる日本の美しい景色の本質は何かと考えると、それ

は水であると私は言いたい」とある。水をめぐる思惟や伝承、旅、文学など、「とらえがたい水を追っ」たさまざまな話の書き下ろし。

・『龍の起源』(荒川紘著)：シュメールに誕生した龍が、世界に広がる話がとても興味深い。ただし、中国の龍はそれとは異質の性格のもので、日本にもこれが伝わった。「日本の龍・蛇は、縄文時代いらい最近まで、日本の自然と日本人の心の深部に潜んでいた」とある。しかし、「高度成長の時代に突入するとともに姿を消していった」と。工業化と開発は「ヨーロッパに生まれた科学文明の到達点」であり、さらにさかのぼれば「古代文明が行きついたギリシアの水の宇宙論の到達点でもある」と著者はいう。そして、この水の宇宙論は龍・蛇の宇宙論に淵源するもので、その宇宙論から生まれた科学文明が日本に生き続けた豊饒の龍・蛇を駆逐するのだと。(去年も挙げたが、安田喜憲著『蛇と十字架—東西の風土と宗教』もとても面白いのでまたここで紹介しておく。)

・『オオカミの護符』(小倉三恵子著)：土蔵の扉に貼られた「一枚の護符」の「謎」を追っていくと、「オイヌさま」から「オオカミ信仰」、さらに山岳信仰へとつながっていく。「日本列島に暮らしてきた人々は、旧いものの全てを根絶やしにすることはなかった。その象徴として、縄文にまで遡ることができる『オオカミ信仰』がある」と著者はいつている。

・『うつぼ舟 I—翁と河勝』(梅原猛著)：『隠された十字架』などで有名な著者の本は以前何冊も読んだ。秦氏を扱う本書もそれに関連する内容。「稲荷といえば稲の神と考えるが、実は伏見稲荷は縄文以来の神であり、縄文の神と弥生の神が一体となり、やがて商売の神となった」という記述があった。本文の初めの方で挙げた『日本の中の朝鮮文化2』<sup>はたのいろぐろぐ</sup>には、この神社について「七一年に秦伊呂具(臣)が勧請し、創始したといわれる」とあり、秦氏の祖霊神であったようだが、縄文にもさかのぼるのだろうか。本文の内容とは関係ないが、吉川幸次郎と梅棹忠夫が文献研究とフィールド研究について茶屋で「大喧嘩」した場

面を梅原が実見した逸話が愉快。「この文献学とフィールド学との、二人のオーソリティーの激突は実に凄まじかったが、私は自己の学問に絶対の自信を持つ二人の学者の誇りは素晴らしいと思った」との感想がある。

・『幻想神空海』(夢枕獏著)：著者は空海に興味があるという。古代の神とは縄文の神であり、それは日本の八百万の神と直結するので、「すべての自然物は霊性を宿している、と信じていたのが縄文人」だとある。そしてそれが色濃く残っていたのが紀伊半島の高野山あたりではなかったのかと著者は考えている。空海はそこで「古代の神々を信仰していた人たち」と仲良くなって「高野山を無事に開くことができた」のだと(そこには古くから丹生一族が住んでおり、水銀を含む鉱物である「丹」の採掘と精製には渡来人が関わっていたようだ)。

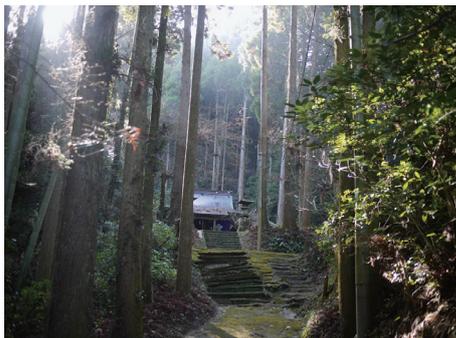
第二部の対談で、神社には「いろんなところにちょっと縄文的な痕跡のようなもの」が残っていると著者が述べると、相手の宮崎信也氏(高野山真言宗般若院住職)が「それはもう一冊にこれ見ればわかるって本があって」といって、谷川健一著『日本の神々』を挙げる。同氏は「それ僕バイブルにしてるんで」ともいつている。

岡谷氏の『原始の神社をもとめて』にも、「神社の少なくとも一部が葬地や古墳に起源していると認めながらも、この問題がこれまで正面切って論じられたことはほとんどない」とあり、「管見の範囲では、谷川健一氏の『神社の起源』くらいのものである」と書いてあった。そして、本の付章には「神社・御嶽・堂—谷川健一氏との対話」がある。この対話もとても興味深いもので(谷川は金達寿と一緒に韓国を旅したこともあると語っている)、御嶽についての話の中で谷川は、「日本の神道をさかのぼりますと、本土でも原始的になればなるほど鳥居も拝殿も本殿もないと言われていきます」といつている。さらに、「私は岡谷さんのこのご本で、『聖地とは何ぞや』という問題を考えさせられた」とも述べている。「地霊」すなわち「土地の持っている霊(国魂でもいいとある)のいるところが一つの聖域として囲われた。

そのような「地主神」の聖域は一時的なものではない。その「縄張り」とは何かというと、例えば山の神とは野獣であるオオカミとかクマで、彼らが縄張りを持っているのと同じように、「神もまた、一種の縄張りのようなものを持っていた時代があった」と。

岡谷氏は『神社の起源と古代朝鮮』の「あとがき」に、前著で対談をしてくださった「谷川氏に本書を見ていただけなかったことが、私にとっては大きな心残りである」と書いている。谷川は水俣出身の民俗学者・地名学者で、「谷川兄弟」の長兄として知られ、平成二十五年に九十二歳で亡くなった。私も『くぬぎの森』第二十一号に書いた「南の島へ行こう」の中で、彼の著書から『柳田国男の民俗学』と『民俗学の愉楽—神と人間と自然の交渉の学、谷川民俗学の真髓』を取り上げたことがある(前者は去年も挙げた)。

・『仏教が好き!』(河合隼雄、中沢新一著): 中沢氏が仏教について心理学者の河合にレクチャー



山鹿市鹿央町合里：菅原神社

する形式の本。河合隼雄の本は読んだことがあるが、中沢氏は初めて。本書が面白かったので他の本も読んでみたい。空海が胎藏界曼荼羅と金剛界曼荼羅を思想として統一的に組織したとあり、「これはすごい発想なんですよ」と中沢氏。男性・女性の二元論で捉える神話の思考方法を取り入れたのだという。「日本にも朝鮮にも、母親と男の子をセットにしたきわめて古い思考法が、いろいろなかたちで発達してい」たそうで、その「母子神の信仰」まで取り込もうとしたのだろうと。「母と子の結合体であるのが、胎藏界と金剛界の曼荼羅のセット」で、それはそのまま「いざなき・いざなみ」だとある。そして、そこから

「八幡様」が出てきて、「日本の神社の三割とか四割をしめるといふ八幡様は、この母子カップルが神様になったものです。たぶんそれが縄文時代の神様のあり方に通じていたんでしょね」とあり興味津々。

・『日本を開く—柳田・南方・大江の思想的意義』(鶴見和子著): 著者の本も初めてだが、令弟・俊輔の本は読んでいる。本書は四回の岩波市民セミナーの講演をまとめたもの。副題にある三人を「貫く共通の流れを私はアニミズムと見立てた」、と「あとがき」にある。「古代天皇制以前に民間にあった信仰」であるアニミズム。「その古きものが脈々として現代にまでうけつがれていることを発掘し、さらに現代科学の先端である分野のエコロジーにむすびついていることを発見したのが、柳田、南方、大江」であると。

・『森林の思考・砂漠の思考』(鈴木秀夫著): 熊大大学図書館除籍済図書。「人間の物の考え方の発展」を「歴史と風土のなかで追跡」したもので、題名にある二種類の思考を述べた、よく知られた本。後半は「現在のわれわれの生活が、縄文時代の文化圏、さかのぼっては、その時代の植生圏に関係しているということ」と「風土の影響というものが、時代を超えて働きつづけるということ」を分布図を用いて論じて、なかなか面白い。「縄文・弥生時代の森林の様子が現在にまで影響を及ぼしている」ことがデータから納得させられる。



長くなったが、最後までお読みいただいた方に感謝したい。だから書いてしまうのは私の癖であり、たくさん本を読んで、いろいろ考え、それをまとめて著者たちの言葉を用いて表現するのが好きなのである。今回で本誌に文章を載せるのも最後と思うのでどうかご容赦願いたい。

私の読書は今後も続く。前述したように、山や森や水の信仰、熊野神社、そして縄文やさらにそれらからつながっていくであろうことを調べ、訪ね、撮り、考えていきたい。機会があればまとめもしたい。もし、本文で読書や神社、縄文などに興味や関心を持たれた方がいらっしゃれば幸甚である。(写真は、マイ「秘境神社」写真集から。)

## スタッフからのおすすめ本

### 学術情報支援室員 合志 和洋

#### 原田マハ「リボルバー」

まずは、著者の原田マハさんについて簡単に紹介します。著者は、関西学院大学文学部日本文学科を卒業、美術館での実務を経験した後に伊藤忠商事に入社されました。会社勤めの傍ら、キュレーターを志して早稲田大学第二文学部美術史科（夜間と土曜日のみ授業）に入学、その間に伊藤忠商事を辞め森ビルに入社して森美術館設立準備室に所属、その後早稲田大学を卒業されています。そして、ニューヨーク近代美術館勤務を経て、2002年フリーのキュレーター、カルチャーライターとなられました<sup>[1]</sup>。経歴を見ると、アートに関しての造詣が深いことに頷けますし、実際にアートを題材にした小説等を多数発表されています。



写真1

さて、本作「リボルバー」（写真1）は、有名な画家であるゴッホとゴーギャンの謎めいた関係性に迫った物語です。ゴッホとゴーギャンがアルルという町で共同生活をしていたことを知る人は少なからずいると思いますが、このゴッホとゴーギャンの共同生活は長くは続きませ

ませんでした。制作に対する価値観のズレから二人の関係は悪化の一途をたどり、そこで起こったのがあの有名な「ゴッホの耳切り事件」です。本作は、二人の関わりを主にゴーギャン側の視点から描くことでゴッホの死を違う観点から見つめ直した、史実に基づくフィクションとなっています。

パリ大学で美術史の修士号を与えられた主人公の高遠冴は、パリ八区にある小規模なオークション会社に務めています。アート好きな母親の影響もあり、冴は子どものときからアートに興味を持ち、アルルにおけるゴッホとゴーギャンの相互影響を中心的テーマとした博士論文に挑戦しようとしている専門家でもあります。そんな冴が務めるオークション会社に、サラと名乗る女性が「ゴッホを撃ち抜いたもの」だという錆びついた1本のリボルバーを持って出品を依頼してきます。その真贋をめぐる物語が展開していきます。

ゴッホは、人生最後の約2ヶ月半を下宿屋兼食堂であるラヴー亭に滞在して過ごしていました。自殺に使ったリボルバーは、そのラヴー亭の主人の護身用だったものらしいです。当時、そのリボルバーはラヴー亭の壁に飾られていたこともあり、冴は現在ラヴー亭を運営している民間の非営利団体の代表に話を聞きに行きます。残念ながら、代表がラヴー亭を買い取ったときにはもうリボルバーはなかったのですが、サラがラヴー亭の常連だったので顔見知りであり、彼女が持っているリボルバーのことも知っていました。そして、そのリボルバーは、サラがある人物に言われたとおりの場所を掘り返して出てきたもので、「ゴーギャンのリボルバー」と言っていたと語ります。冴は、帰路の車内で考えを巡らせるうちに「ゴッホはゴーギャンに撃たれたのではないか」との疑惑を抱きます。その後さらに、サラから冴だけに伝えられた話から、もっと深く物語が掘り下げられます。調査したりボルバーからわかったこととは？

パリの競売会社ドゥルオによると、ゴッホが自殺に使ったとされるリボルバー（写真2）は2019年6月19日にパリで競売にかけられ、予想額の2倍近い130,000ユーロ（約1,570万円）で落札されています<sup>[2]</sup>（落札金額については報道機関により多少のバラツキがあります）。ゴッホは、このリボルバーで自分の左胸を撃って自殺したと言われていますが、果たしてその真相やいかに・・・



写真2

写真1 原田マハ著「リボルバー」（幻冬舎刊）表紙

写真2 ゴッホが自殺に使ったとみられているリボルバー（[2]より転載）

[1] 原田マハ公式ウェブサイト、「マハの展示室」, <https://haradamaha.com/>（最終アクセス2023.2.10）

[2] Reuters, 「ゴッホが自殺に使用した銃、1570万円で落札 予想額の2倍」, <https://jp.reuters.com/article/france-vangogh-gun-idJPKCN1TL03P>（最終アクセス2023.2.10）

## 「読書感想文」の意義とは？

リベラルアーツ系 有働 万里子

「読書感想文はなぜ必要なのか？」「強制☆5レビューは拷問だよ？」「長期休みの課題として多くの学校で出されているがどのような意義があるのだろうか？」といったニュースが今年も取り上げられていた。学生からも「何で読書感想文を書かなければいけないんですか？」という質問を受ける。

読書を習慣としてしない、一ヶ月に読む本が0という高校生が半数を占める今、「読書自体が苦痛である」、「本を読んでも感想が出てこない」という意見の方がマジョリティーかもしれない。高校生に強いる読書感想文にどのような意義を見出すのか？今年こそ国語科として「読書感想文はなぜ必要なのか」という命題にきちんと向き合おうと思う。

本を読む機会を設けるためである、長文を書く練習になる、感受性を養うためである、、、。妥当性のある答えはいくつも転がっているが、私が大切にしたいのは、「おもしろかった」、「なんとなく良いと思う」、逆に「つまらなかった」、「苦痛だった」を言葉で適切に表現するトレーニング、いわば体感の一步先を語る経験である。

毎日スマホをみれば膨大な情報が目に入ってくる。なんとなくおもしろそうだから、タップする、スクロールする、つまらなかったから読むのをやめてタブを閉じる、一日にこのようなことを何度行っているだろう。その膨大な経験も毎回「おもしろかった」、「なんかよかった」、「つまらなかった」で途切れている気がする。

読書感想文を書くということは、「なんとなくそう感じた」経験を深掘りする機会である。何が、どのように、おもしろいってどう言い換えよう、そこに頭を悩ませ、言葉で表現しようとする時間が生まれる。それは苦痛だと感じる人がいるかもしれないが、何か一つのものとして長時間向き合い、そのおもしろさや有意味性、感情を語る経験は、今後も必要なスキルである。普段の会話でも今後向き合うレポートでも、「感じたこと・考えたことをどのように伝えようか」の繰り返しである。

そのトレーニングとして、読書感想文とにらめっこをする経験は意義があるものだと感じる。書く中で、言葉を調べ、表現を考える時間はどうか大切にしてもらいたい。

そしてもう一つ、長時間向き合うことになる本との出会いも大切にしたい。

「この世界に本は何冊あるだろうか？」気になった人は検索してほしい。おそらくははっきりと正しい答えは出ない疑問である。

総務省の統計によると、令和元年に日本で出版された本の総数は71,903冊、一日にすると約196冊もの本が出版されている。なかなか数が膨大で想像もつかないが、それら全ての本を網羅するのはいくら本好きでも無理だろう。

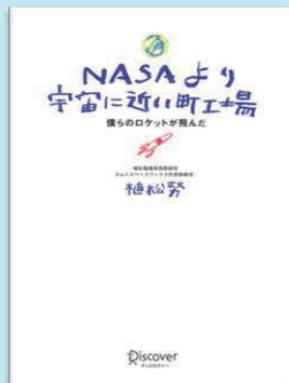
一週間に一冊、本を読んだとしても一生で出会える本の数は1年間(52週)×85年=4,420冊である。日本で一年に出版される数にも遠く及ばない。一ヶ月に読む本の本数が0という高校生が約半数を占める今、これまでに会ってきた本、今後出会う本、これから読書感想文で書こうと思っている本もとても貴重な出会いだということが分かる。

どの本を選ぼうか、どんな言葉で表現しようか。少し鬱々とする課題かもしれないが、一期一会の本との出会い、自分なりの素敵な表現と向き合う機会となれば幸いである。

### 有働先生のおすすめ本

◆夢を持ちづらい現代に生きる学生におすすめ

「NASAより宇宙に  
近い町工場」  
植松 努 著



◆兄弟の絆がつむぐ物語、ミステリー好きにもおすすめの読みやすい作品

「重力ピエロ」  
伊坂 幸太郎 著



図書館入退室管理システムについて  
株式会社ワイズ・リーディング  
菅原 学、小山 大翔

今回新たに、貴校の図書館に導入される入退室管理システムの開発に関わらせて頂いた株式会社ワイズ・リーディングの菅原と小山です。村上先生から「図書館だよりの原稿を1ページ書いて頂きたい」というお願いを頂きましたので今回のシステム開発を引き受けた経緯やシステムの使い方についてなどを交えながら書いていきたいと思います。

まず、今回引き受けた経緯といたしましては、貴校の奨学後援会から「今年の卒業生からの卒業記念品として図書館への入退室を管理出来るシステムを作って欲しい」という企画を頂きました。

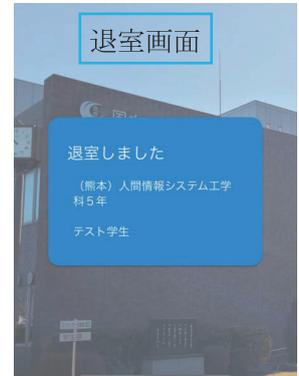
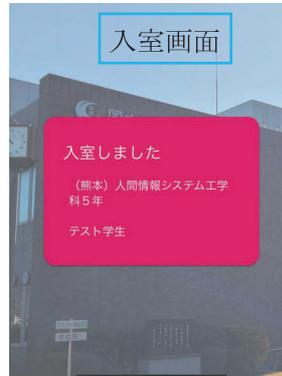
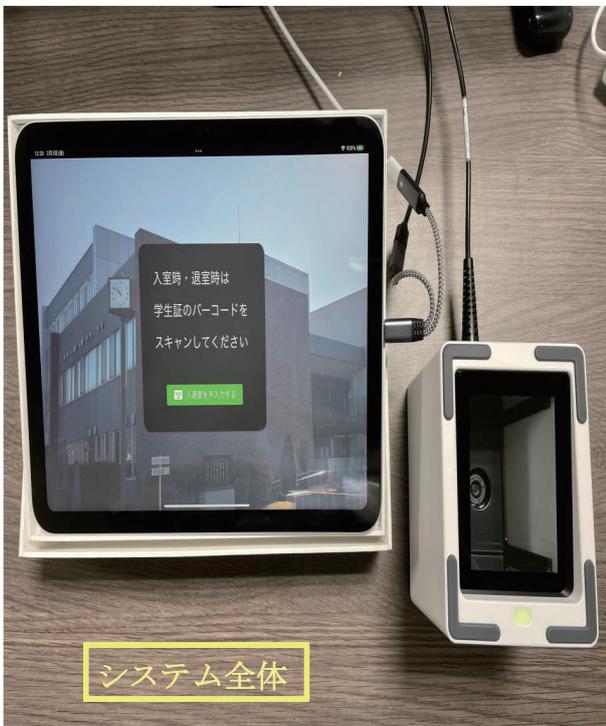
実は我々は貴校貴キャンパスの卒業生で、菅原は旧電波高専時代の卒業生、小山は2022年3月に卒業したばかりです。この企画を頂いて、「母校の役に立てるシステムの開発に関われる日が来たか!」と胸を躍らせました。そして、喜んでお引き受けしました。

システム開発は、我々とAE2年の阿部将太さんで行いました。手順としては、我々がシステム開発で役に立つサンプルソースの提供や、開発をするために必要な開発環境の設定を行い、阿部さん

がそれを主に開発を行うという流れです。普段の高専の授業では扱わない言語・開発環境で開発をするので、最初は心配もありましたが、対応して頂いた阿部さんの理解が早く、順調に開発が進んでいきました。改めて高専生の凄さを感じました。

次に、今回開発したシステムの使い方について説明したいと思います。システムでは、学生に配布されている学生証を使用します。図書館入退室時に専用のバーコードリーダーに学生証にあるバーコードをかざすことで、誰がいつ入退室したか自動で管理されます。また、学生証を忘れてしまった場合でも手動で入退室登録出来ます。管理者メニューでは指定した日付の入退室者を調べる事や、現在登録している学生情報の追加・更新などが出来ます。

最後に、今回システム開発を依頼して頂いた奨学後援会の皆様、機材の準備や必要なデータを提供して下さった図書館関係者並びに村上先生、特別研究など大変忙しい中システムを無事に完成させて下さった阿部さんにこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。皆様のおかげで素晴らしいシステムを完成させることが出来ました。これからこのシステムがより多くの学生、図書館関係者の方々の役に立つことを願っております。



システムを開発いただいた(株)ワイズ・リーディングの菅原様、小山様、AE2年の阿部翔太様ありがとうございました。なお、このシステムは奨学後援会から令和4年度卒業生・修了生の記念品として寄贈されたものです。卒業生・修了生および後援会の皆様に感謝いたします。

# 学生図書委員が選ぶ おすすめ本コーナー

今年は図書委員で前期と後期に一回ずつブックハンティングを行いました。

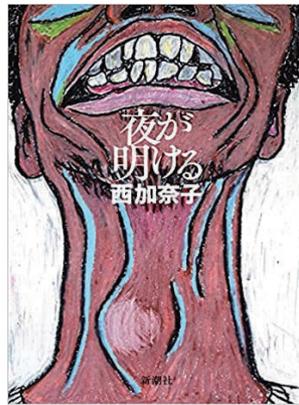
図書館にたくさんの本を配架しましたが、そんな中で図書委員長を含めた図書委員の学生が選ぶおすすめの本を紹介したいと思います。図書館に立ち寄りられた際はぜひ手に取ってみてください。

## 『夜が明ける』

著者：西 加奈子

出版社：新潮社

15歳の時、高校で「俺」は身長191cmのアキと出会います。普通な家庭で育った「俺」、母親にネグレクトされていた吃音のアキ、共通点なんてないはずの二人が互いになにかかけがえのない存在になっていきました。大の学卒業後、別々の道へ進む二人の友情と成長の描きさや弱さ、生きていく奇跡を描いた作品です。



## 『ガラスの海を渡る舟』

著者：寺地 はるな

出版社：PHP研究所

「みんな」と同じことができない兄と、何もかもが平均的な妹。2人は祖父の遺言をきっかけにともにガラス工房を継ぐことになり暮らしています。幼いころから落ち着きがなくコミュニケーションが苦手な兄と対照的にコミュニケーションが得意な妹は互いに苦手意識を抱えている。そんな2人のガラス工房を営む10年間の軌跡を描いた作品です。



## 『黒牢城』

著者：米澤 穂信

出版社：KADOKAWA

天正6年の冬、本能寺の変より4年前。織田信長に謀反して有岡城にこもっていた荒木村重。だが城内で起こる様々な事件に翻弄されています。動揺する人心を落ち着かせる村重は土牢に幽閉されていた織田方の軍師衛黒田の謎を解くべく、この事件の裏に潜んで挑む！



## 『グレース・ホッパー：プログラミングの女王』

文：ローリー・ウォールマーク

絵：ケイティ・ウー

訳：長友 恵子 出版社：岩崎書店

コンピュータープログラムの歴史に残るグレース・ホッパー科学や数学に秀でていたグレースは誰もがコンピューターを使えるように人間の言葉を読み取るプログラムを作りました。

今まで大きく取り上げられることはなかったが大きな功績を残していた女性たちを取り上げた伝記絵本シリーズ！

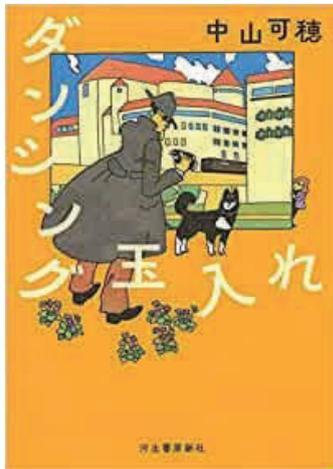


『ダンシング玉入れ』

著者：中山 可穂

出版社：河出書房新社

孤高の殺し屋コリオレイナスに新たな依頼が届く、ターゲットは宝塚歌劇団月組のトップスター・三日月傑。ツカオタの協力員ハートも一緒にトップスターの命を付け狙うが完遂できるのか！めくめく秘密の花園に足を踏み入れたら、殺し屋がたどる数奇な運命は！？

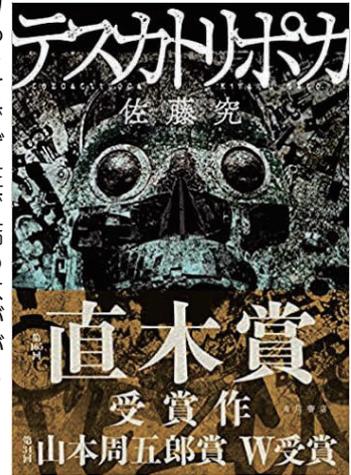


『テスカトリポカ』

著者：佐藤 究

出版社：KADOKAWA

メキシコのカルテルに君臨した麻薬密売人のバルミロだが敵対組織との抗争により逃走します。潜伏先ジャカルタで再起を図るため裏社会でチャンスをつかぎました。一方で麻薬組織から逃げて日本に来た女性のルシア、川崎でヤクザの土方と結婚しコシモをもうけます。コシモは育児放棄されながらも成長しますがバルミロと出会ってしまう…



『星を掬う』

著者：町田 そのこ

出版社：中央公論新社

ラジオ番組の賞金欲しさに、小学1年生の夏休みに母とふたりで旅をした思い出を投稿した千鶴。楽しかったはずの旅のあと、彼女は母に捨てられていました。そんなラジオの投稿を聞いて、連絡をしてきたのは自分を捨てた母の「娘」だと名乗る恵真でした。その後母・聖子と再会し同居することとなった千鶴だが記憶と違う母の姿を見ることとなって…



編集後記

未だ新型コロナウイルスの影響により自由な活動を制限される期間ではありますが今年度もオンラインによるブックハンティングを行いました。学生図書委員の皆さんが選んでくれた本が図書館にたくさん所蔵されていますので是非図書館に足を運んでいただきたいです。図書委員の皆さん、1年間お疲れさまでした。

最後に、1年間学生図書委員会のサポートをしていただいた学生課図書係長の井澤さん、『くぬぎの森』作成に協力していただいた村上先生、合志先生、そして学生図書委員の皆さんに感謝申し上げます。

CI5 学生図書委員長 坂田 貢晟

## 図書館統計（令和4年1月～令和4年12月）（令和5年1月26日現在）

入館者数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
		571	459	563	1,335	1,120	1,258	972	589	641	972	1,009	649

蔵書数	和書	洋書	合計
	70,322	4,640	74,962

日本十進分類法 (NDC) 分野別貸出冊数	0総記	1哲学	2歴史	3社会科学	4自然科学	5技術、 工学	6産業	7芸術、 美術	8言語	9文学	その他	合計
		407	58	30	220	228	268	30	115	2,029	607	0

月別貸出冊数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
1年生	15	29	8	34	9	19	18	30	1	12	14	40	229
2年生	0	10	0	32	31	27	9	70	7	37	29	38	290
3年生	68	56	4	251	133	144	128	43	37	171	99	130	1,264
4年生	62	70	21	38	38	29	28	46	4	45	26	29	436
5年生	16	29	0	68	64	61	42	50	13	52	75	47	517
専攻科1年生	41	45	10	10	11	16	8	27	0	8	8	17	201
専攻科2年生	9	4	0	27	34	31	18	24	3	35	28	24	237
教職員	89	69	66	83	61	65	50	49	37	33	47	21	670
その他(一般 利用者等)	10	7	18	9	10	10	12	10	10	15	10	10	131
合計	310	319	127	552	391	402	313	349	112	408	336	356	3,975

### 開館時間

月曜日～金曜日	8:30～19:00（退館時間18:45）
春季・夏季・冬季休業期間中の月曜日～金曜日	8:30～17:00（退館時間16:45）

### 休館日

- ・土曜日・日曜日
- ・国民の祝日
- ・年末年始等の校長が定めた日
- ・一斉休業日
- ・その他図書館長が休館と定めた日

※ただし、特別な場合はこの限りではありません。開館時間および休館日については、本校WebページやMyOPAC（利用者の個人ページ）で確認の上、ご来館ください。

★入館に際し、制限等がある場合もございますのでご注意ください。

### 貸出期間と貸出冊数

貸出の種類	借受者	貸出期間	貸出冊数	備考
一般貸出	教職員	2週間	5冊以内	
	学生			
	一般			
長期貸出	教職員	2ヶ月	10冊以内	教育および研究に必要な図書館資料に限る
	学生	春季・夏季・冬季休業期間とその前後1週間	10冊以内	一般貸出の冊数を含む
	卒業研究用 特別研究用	2ヶ月	10冊以内	卒業研究および特別研究に必要な図書館資料に限る